

バンクーバー在外研修顛末記

上野 誠 治

昨年4月から約1年間、カナダの西海岸にあるバンクーバーで在外研修をする機会を得た。当初は、重症急性呼吸器症候群 (SARS、新型肺炎) やイラク戦争で世間が騒がしく、何かと不安な面もあったが、それもやがて沈静化していった。バンクーバーはアジアからの玄関口になっていることもあってアジア系移民が多く住んでいる。特に、香港が中国に返還された 1997 年前後を境に香港からの移民が急増したようである。前回、1992 年にバンクーバーを訪れた際にも、アジア系移民の多さに驚いたが、今回はそれ以上であった。どこに行ってもアジア系移民の姿があり、時として白人よりもアジア人が多くいる状況に遭遇することもまれではなく、一時「ホンクーバー Hongcouver」と揶揄されたことがあったということにも合点がいった。また、現在は、香港からの移民は減少しているようだが、それに代わって台湾と中国大陸からの移民が急増しているようである。その影響もあってか、1月下旬の Chinese New Year (旧正月) の頃には、スーパーマーケットは大売り出しをやり、小学校の授業でも教材になっていた。

今回の研修先は、バンクーバー郊外に広大なキャンパスを構えるブリティッシュ・コロンビア大学 (通称 UBC) の言語学科であった。創立年は 1915 年で、キャンパスというより、それだけで一つの「街」を形成しているような印象を与える。研修する際の受け入れ教授は、先住民の諸言語に関する音韻論と形態論を専門とするパトリシア・ショー教授であった。ちなみに、カナダでは、先住民の呼称として、侮蔑的な表現とされる Indian が使われないのはもちろん、Native American という言い方も一般的ではなく、その代わりに 1980 年代初頭から First Nations が盛んに使われていて、書店などに行くと First Nations と書かれた本をよく見かける。

大学では、学科長の特別の計らいで、大学院生との相部屋ではあったが、共同の研究室を利用することができた。この研究室は、有線・無線のいずれでもインターネットと接続可能で重宝した。この研究室は、大学院生であれば、部屋の鍵を申請すれば誰でも利用できるのだが、常時利用しているのは、博士課程で学ぶナイジェリア出身の Oladiipo Ajiboye 君と Solveiga Armoskaite さんの二人だった。

滞在中、UBC で「代名詞の形式と機能に関するワークショップ」が、9月の3日間で開催され、それに参加することができた。比較的小規模な研究会だったが、世界的に著名な研究者が海外から集い、「代名詞」をテーマとしたたくさんの研究発表が行われていた。ワークショップという性格からかもしれないが、フロアーから活発な意見が続出し、意見が対立するときは、時には口論をしているかのような勢いで議論をしているのを見て、日本におけるこの種の研究会との違いを実感した。

今回の在外研修には、家族も帯同したが、良い機会なので長女と長男は地元の小学校に通わせた。カナダの学校教育制度が日本と最も違う点は、教育制度が全国一律ではなく、州もしくは準州が決めていることである。学年制も州によって異なるが、バンクーバーのあるブリティッシュ・コロンビア州の場合は7-5制である。小学校1年生に当たる Grade 1 は6歳児であるが、5歳児を対象にした準備教育 (幼稚園 Kindergarten) も設けら

れている。ただし義務教育ではない。この「幼稚園」は日本の場合とは異なり、同じ小学校の校舎の中に Grade1 より1級下の位置づけで併設されていて、学校行事もほとんどすべて小学校と共通になっている。

出発直前になって、確保していたバンクーバーでの住居が5月からしか入居できないことになったが、幸い、知人でサイモン・フレーザー大学教授のジョン・チャント夫妻がその間の約1ヶ月間、家族5人揃ってホームステイさせてくれることになった。夫妻にはその後いろいろと家族ぐるみでお世話になった。

6月末に、当時2歳半になる次男の様子が急変し、小児専門救急病院に連れて行ったところ、そのまま感染症で4日間入院することとなる。様子の変化も急だったが、幸い回復も驚くほど早かった。もともと、日本の病院であれば、もう少し長い入院になっていたかもしれない。不慣れた土地での次男の入院であったため、家族全員が疲労困憊したが、現地の病院内の様子を垣間見る絶好の機会となった。また、次男の様子が急変する前に、ファミリー・ドクターの診察を受けていたのだが、その時点ではそれほど重篤な病気であるとは診断されず、その直後に救急病院に行かざるを得なかったことを思うと、このファミリー・ドクターの制度にどれ程のメリットがあるのか、やや疑問に感じずにはいられなかった。また、通常体調に異常を感じた場合、電話予約などをしてからこのファミリー・ドクターのところへ行くことになるが、近年、予約なしで診察を受けられるウォークイン診療所も増加しているようで、実際市内のところどころで見かけた。

10月31日は、ハロウィーンの日で、子供たちは仮装して登校する。学校では、体育館に子供たちが集合して、仮装を披露し合っていた。副校長、先生、用務員も思い思いの仮装をしており、学校全体でハロウィーンを楽しんでいるようだった。また、午後からもハロウィーン・パーティがあり、今日は、ほとんど「勉強」はなかったようだ。その夜、子供たちを連れて近所の家々を訪ね、「Trick or Treat」（お菓子をくれないといたずらするよ）を実践する。子供たちが、「Trick or treat」と玄関先で叫ぶと、そこの家の住人がお菓子をふるまってくれる、という趣向の習慣である。北海道の七夕で見られる、「ローソク出せ、出さないとかっちゃク（「ひっかく」の意）ぞ」などと子供たちが歌いながら近所の家々を回り、ローソクやお菓子をもらう習慣と同じである。見知らぬ土地で、知らない家を訪ねることに最初躊躇したが、子供たちもひとたび要領がわかると、大張り切りで家々を訪ね、持参した紙袋いっぱいのお菓子をもらって大喜びだった。

年末から新年にかけて、雪が降る。新年になり授業が再開した直後にも雪が降り、小学校はもちろん、驚いたことに大学までが休校となった。札幌の感覚では、それほどの量の雪ではないのだが、非降雪地帯にあるバンクーバーではあの程度の雪でも生活に支障が出るようであった。年が明けると、帰国のことが気になりだしたが、特に3月に入ると、帰国の準備に追われた。ほぼ荷造りを終えた後、自宅の前庭で引っ越しセールを行い不要なものは格安で処分した。

そんなこんなで感傷に浸る間もなく慌ただしく帰国したが、帰国早々4月からは教務委員に再登板し、朝から晩までガイダンス業務に従事する内に、幸か不幸か、あっという間に現実に引き戻されてしまった。職場復帰へのリハビリなど、まったく必要なかった。そして、悲しいかな、仕事の合間にふと、この1年間カナダで暮らしたことが、まるで遠い昔の出来事になってしまったように感じることもさえた。文字通り、夢のような1年間であった。

（英語文法論、英語史概説）